

第3回企画展

新しい久喜の たからもの

—新収蔵資料展—



久喜市立郷土資料館

ごあいさつ	1
指定文化財	2
◆ 円 空	2
郷土資料館の収蔵資料	3
久喜の人物	4
◆ 本多 静六	4
◆ 中島 撫山	5
歴史資料	6
◆ 栗橋関所と関所番士	8
◆ 久喜高等女学校	9
◆ 久喜の鉄道と駅	10
民俗資料	12
引用・参考文献	17
展示資料一覧	18

1. 本書は、久喜市立郷土資料館が平成 25 年 7 月 20 日から 11 月 10 日まで開催する第 3 回企画展「新しい久喜のたからもの 一新収蔵資料展一」の展示図録です。
2. 展示資料の全てが本書に掲載されているわけではありません。また、会期中に展示替えを行うため、本書に掲載されていても会場に展示されていない場合があります。
3. 寄贈・寄託者名は、寄贈・寄託時のものです。
4. 今回の企画展を開催するにあたり、次の方々からご指導・ご協力をいただきました。記して感謝いたします（五十音順・敬称略）。
足立 桂子、(故)足立 正路、池田 和子、内田 貞一、内山 貴光、榎本 康二、岡本美知子、折原 一、小林 純、小林 孝秀、佐藤 佳乎、島田 昌弘、(故)相馬 一郎、高橋 雄介、平井 弥一、平澤 榮蔵、吉岡 良昭
幸福寺、不動寺、原・河原・下出地区
5. 本書は、本館学芸員 池尻 篤が執筆し、金子俊則、川邊映子、居山央子が協力しました。

ごあいさつ

郷土資料館では、郷土に関する様々な資料の収集に努めています。

今回の企画展では、平成 22 年 3 月の新久喜市誕生以降、新たに収集した資料を展示しています。これらの資料は、本多静六や中島撫山など久喜市の偉人に関する資料、市指定文化財となっている仏像や棟札、日々の生活の中で使われてきた民具資料など、久喜市の歴史や文化を知るうえで貴重な資料となるものばかりです。本企画展が郷土に対する理解を深めていただく機会となれば幸いです。

結びになりますが、資料を御提供いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

平成 25 年 7 月 20 日

久喜市教育委員会

教育長 吉田 耕治

◆ 円空

円空（1632-1695）は美濃国（現 岐阜県）出身の僧侶で、生涯に 12 万体の仏像を彫ることを自ら誓い、各地を巡り歩きながら仏像を彫りました。

円空の彫った仏像は、あまり手数をかけずに彫るもので、素朴で優しい作風となっており、「円空仏」と呼ばれて人々を惹きつけてきました。近年でも、東京国立博物館（平成 25 年）や埼玉県立歴史と民俗の博物館（平成 23 年）などで円空をテーマとした展示会が開催されており、今なお高い人気があることをうかがわせます。

埼玉県には、岐阜県、愛知県に次いで多くの円空仏が残されています。そのなかでも、久喜を含む県東部地域に集中しています。その理由としては、円空仏は日光にも残されており、県東部には江戸と日光を結ぶ日光道中が通っていることから、円空が江戸と日光を行き交う途中に県東部で製作したためと考えられています。



市指定文化財

もくぞう ふどうみょうおう ざぞう えんくう
木造不動明王坐像（円空作）

幸福寺 寄託

江戸時代

円空が彫った不動明王の坐像です。技法などから円空の晩年にあたる天和・貞享から元禄年間（1681～1695）の作であると考えられています。

この像は、杉の丸太材を縦に半分に分けて、割った面に不動明王を彫り出しています。像の背面は、表皮を剥いだ木肌をそのまま残しています。底には、鋸の切断面を残しています。

市指定文化財

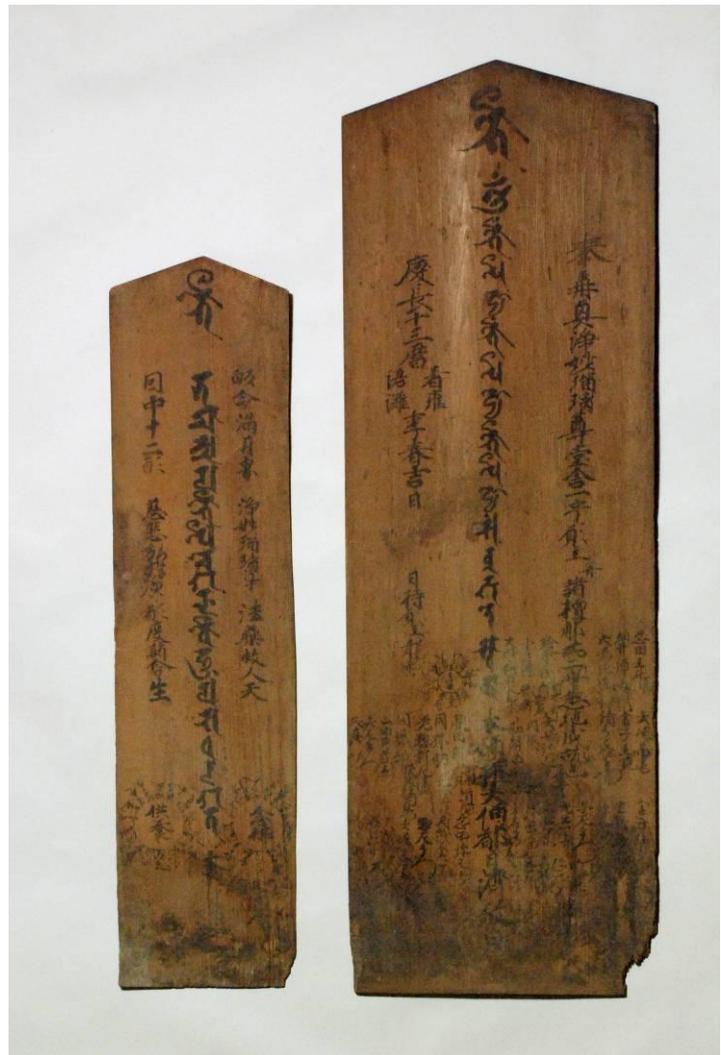
きゅうい おういんやくしどうむなふだ
旧 医王院薬師堂棟札

不動寺 寄託

けいちょう
慶長 13 年 (1608)

よけぼり
除堀地区にかつて存在していたいおういん やく
しどう
師堂の棟札です。棟札とは、建物の建築や修理
の際、年月日や目的などを記して、棟木などに
打ち付ける木の札です。

しんぎ しんごんしゅう
医王院は新義真言 宗の寺院で、めいじ
明治3 年
(1870) に廃寺となっていますが、この棟札
はいじ
の薬師堂は現存しています。建物と棟札が両方
とも現存する事例として、埼玉県東部では最古
の例とされています。



旧医王院 薬師堂(久喜市除堀)

郷土資料館の収蔵資料

郷土資料館で収蔵している資料は、歴史・考古・民俗資料を中心とした、郷土に関する資料です。収蔵資料のうち、常設展や企画展、特別展などで展示している資料はほんの一部で、大部分の資料は収蔵庫で保管しています。寄託・借用資料も含めると1万点弱の資料を収蔵しています。

歴史・民俗資料については、その大部分が市民の皆様から御寄贈いただいたものです。資料寄贈のお申し込みがあった場合、歴史的な価値などを判断し、受け入れを行っています。

受け入れた資料は、埃を落とすクリーニング作業を行います。その後、資料に影響を与えない専用のガスで、殺虫・殺カビ作業（燻蒸作業）を行います。

1点ごとに資料名、寄贈者名、寄贈年月日等を記したラベルを付けて、収蔵庫に収蔵します。

◆ 本多 静六

本多静六（1866-1952）は、日本初の林学博士として、日本の林学や造園学の基礎を築きました。明治神宮の森や日比谷公園など全国各地の数百に及ぶ公園の設計に携わったことで知られています。

静六は、慶応2年（1866）に河原井村（現久喜市菖蒲町河原井）の折原家に生まれました。9歳の時に父を亡くし、苦学の末に東京山林学校（後の東京帝国大学農科大学・現東京大学農学部）に進学しました。在学中に本多家の婿養子となり、本多姓となります。

卒業後にはドイツへ留学し、ミュンヘン大学で博士号を取得し帰国します。明治32年（1899）には林学博士の学位を取得、翌年東京帝国大学農科大学教授となりました。

学術研究だけにとどまらず、非凡な才能を発揮して莫大な財産を築きました。しかし自らは簡素な生活を続け、多大な財産は公共事業のために寄付をしています。



久喜の人物



『林政学』

明治28年（1895）



『耐乏生活の実践』

昭和19年（1944）

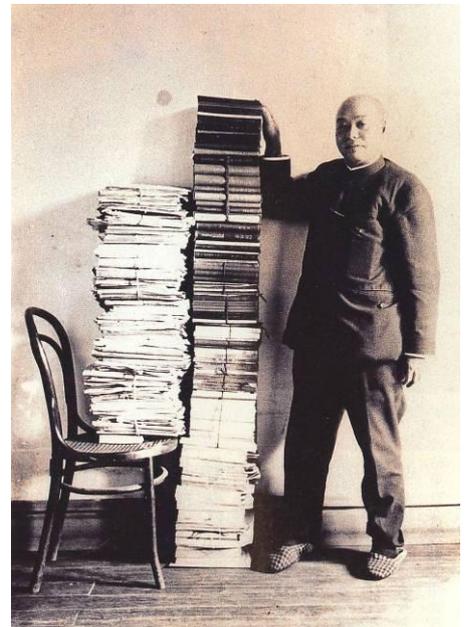
本多静六 著書

小林 純氏 寄贈

本多静六が執筆した書籍です。

静六は生涯で数多くの著書を執筆し、その数は370余冊にも達しました。

著書の内容は、専門としていた林学関係はもちろんですが、自ら提唱して実践していた四分の一貯蓄法や節約術、幸福論など多方面に及びました。



自らの著書と並ぶ本多静六

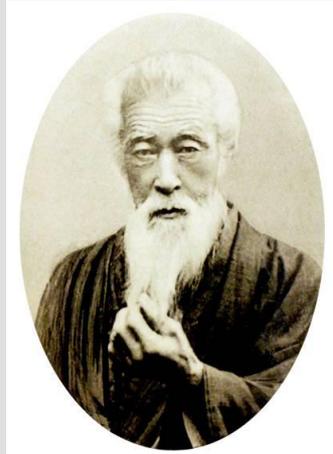
◆ 中島 撫山

中島撫山（1829-1911）は、久喜に私塾「幸魂教舎」^{さきたまきょうしゃ}を開設して地域の人々の教育に尽くしました。門下生は1,500人とも言われ、明治・大正時代に久喜やその周辺地域において行政・経済・教育などの各方面で活躍した人々の多くは撫山の門下生^{もんかせい}でした。

撫山は、文政12年（1829）に江戸亀戸（現 東京都江東区）に生まれました。漢学者の亀田綾瀬^{りょうらい おうこく}・鶯谷^{かめいど}に学び、安政5年（1858）に江戸両国で私塾「演孔堂」^{えんこうどう}を開設しています。

幕末維新时期には混乱を避けるために江戸を離れ、明治2年（1869）に久喜へ移りました。明治6年に幸魂教舎を開設し（後に言揚教舎^{ことあげ}）、晩年まで地域の人々の教育に努め、明治44年に亡くなりました。光明寺（久喜市本町1丁目）に墓所があり、幸魂教舎跡地には「撫山中島先生終焉之地」^{しゅうえん}碑が建てられています。

撫山の孫には、『山月記』などの作品で知られる中島敦^{あつし}がいます。

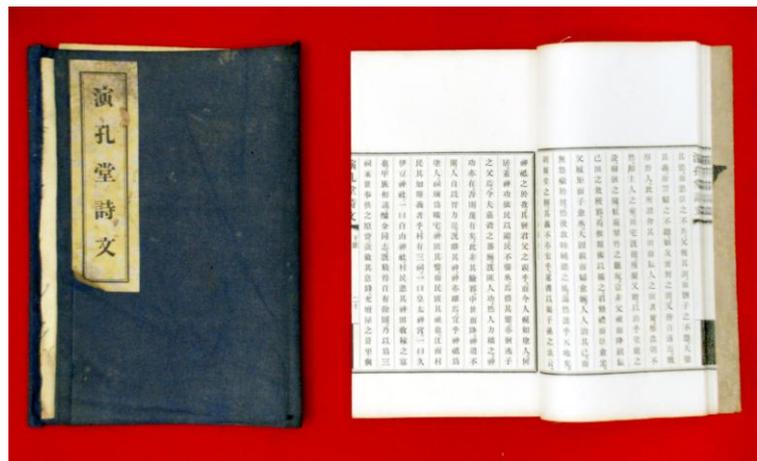
えんこうどう しぶん
演孔堂詩文

内田 貞一氏 寄贈

昭和6年（1931）

中島撫山^{なかじま ぶざん}による漢詩^{かん し}や雑文^{ざつぶん}、碑文^{ひぶん}などを、撫山の3男である中島竊^{しやう}が一冊にまとめた詩文集です。「演孔堂」^{えんこうどう}とは、撫山の堂号^{どうごう}です。撫山が撰文^{せんぶん}した久喜やその周辺の石碑^{めいぶん}の銘文も数多く掲載されており、撫山の久喜での活動を知る上でも貴重な資料です。

ただし、撫山は自らが書いた原稿^{げんこう}を保管しておく人物ではなかった^{へんしゅう}ので、編集に際しては苦労があったようです。

なかじま ぶざん さんちゆうもんどう
中島撫山筆「山中問答」

折原 一氏 寄贈

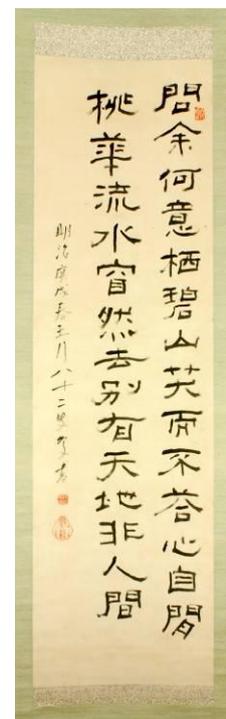
明治43年（1910）

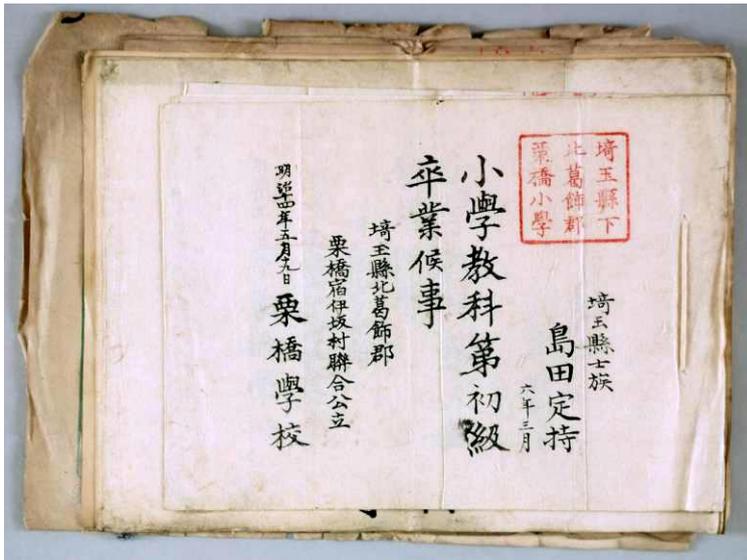
中島撫山^{なかじま ぶざん}の筆による掛け軸^{か じく}です。中国の詩人李白^{し じん り はく}の七言絶句「山中問答」^{れいしよたい}を隸書体で書しています。

撫山は依頼により書や画、神社の幟^{のぼり}の揮毫^{きごう}などを行っていたため、久喜やその周辺にはそれらの作品が残されています。

なお、撫山はこの書を書いた翌年（明治44年）6月に83歳で亡くなっています。

問余何意栖碧山 笑而不答心自閒
桃華流水杳然去 別有天地非人間
明治庚戌春王月 八十二叟 慶書





くりはしがっこうしょきゅうそつぎょうしょうしょ
栗橋学校初級卒業証書

島田 昌弘氏 寄贈

明治14年(1881)

くりはしがっこう しょきゅうそつぎょうしょうしょ
栗橋学校の初級卒業証書です。初級は、現在の制度では小学校1年生にあたります。

栗橋学校は、明治5年(1872)の「学制」^{がくせい}はっふに伴い、同年に栗橋宿内の個人宅に私立学校として開校しました。明治6年(1873)には栗橋宿と伊坂村の連合公立となりました。

明治9年(1876)9月9日には新校舎が完成しています。



くりはしかし よしおかそうこ あずか しょう
栗橋河岸 吉岡倉庫 預り証

吉岡 良昭氏 寄贈

明治時代

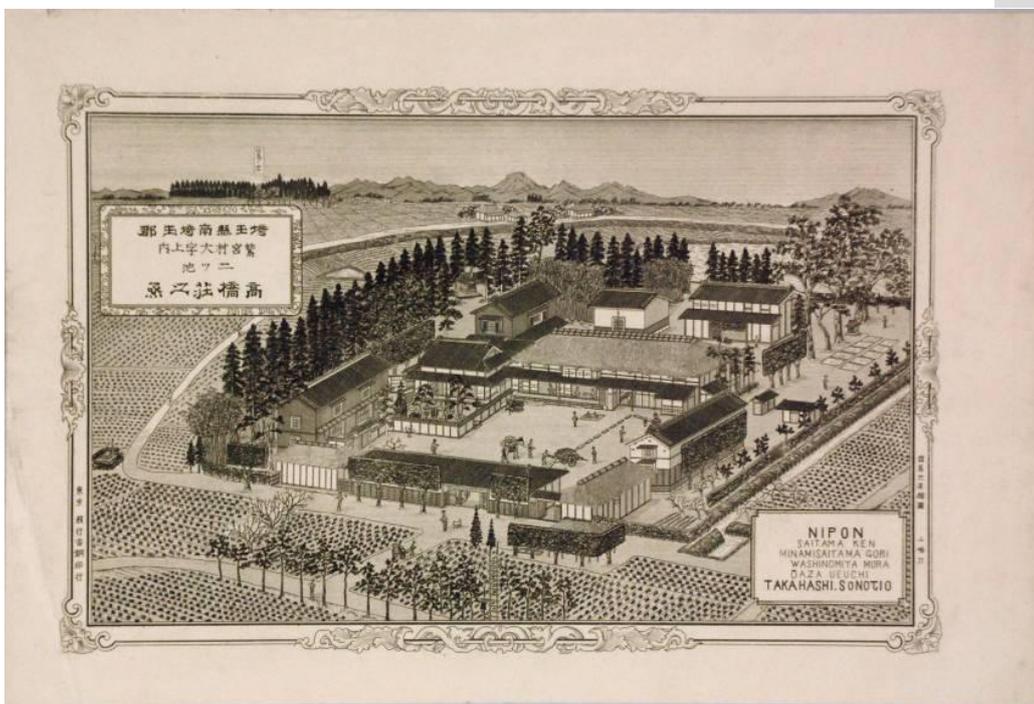
くりはしかし そくこかいそうぎょう
栗橋河岸(川岸)で倉庫回漕業を営んでいた吉岡倉庫の荷物預り証の様式です。

河岸とは川の港のことです。栗橋河岸は栗橋宿の利根川沿いにあった船戸町に存在し、利根川舟運の拠点として栄えましたが、鉄道輸送の発達により大正時代末より徐々に活気が失われました。昭和15年(1940)から始まった堤防工事により、全戸が移転を余儀なくされました。



『栗橋町史 民俗Ⅱ』より改変して転載

明治時代末期の栗橋河岸



たかはしそんのじょう やしきず
高橋荘之丞 屋敷図

高橋 雄介氏 寄贈

明治 25 年 (1892)

わしのみやむらおおざうえうち たかはしそんのじょう どう
鷺宮村大字上内(現久喜市上内)の高橋荘之丞の屋敷を描いた銅
はんが 版画です。明治 25 年発行の『大日本博覧図』第 7 編に掲載されてい
る図で、当時の有力農家の屋敷の規模や建物配置がわかります。

あんせい こちよう わしのみやそんちよう さい
荘之丞は安政元年 (1854) 生まれ、上内村戸長や鷺宮村長、埼
たまけんぎかいぎいん ようしよく れきにん おんこうぎ
玉県議会議員 (第 16 代議長) などの要職を歴任しました。温厚で義
きようしん
侠心に富み、村政及び県政の発展に力を発揮した人物でした。



高橋荘之丞

『高橋雙鏡翁記念録』より転載

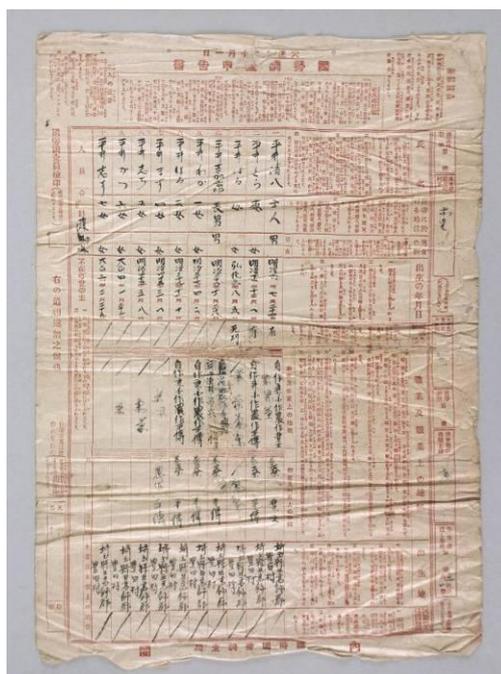
こくせいちょうさ ちょうさひょう
国勢調査 調査票

平井 弥一氏 寄贈

大正 9 年 (1920)

たいしょう こくせいちょうさ
大正 9 年に実施された第 1 回国勢調査の調査票です。国勢
調査は人口状況を明らかにするために行われる全国規模の調
査です。大正 9 年以降、ほぼ 5 年ごとに行われており、最近で
は平成 22 年に行われた国勢調査で第 19 回を数えます。

とよだむら どうしめ
豊田村 (現久喜市河原代など) のこの家族は、当主夫婦に
こだくさん
母、1 男 7 女の子供達があり、子沢山であった大正時代の状況
がうかがえます。





(内面)「近衛歩兵 第二連隊 帰休記念」
(外面)「濱 田」



(内面)「騎西領用水堰」
(外面)「明治三十老年五月・田箇谷村外十一箇
村町村組合・騎西領用水堰改築記念
贈呈 高橋荘之丞君」



(内面)「明治四十一年十月 電話開始記念 久喜郵便局」
(外面) な し

記念盃

高橋 雄介氏 寄贈

明治～昭和時代

記念盃は、何らかの記念の際に 盃 を作成し、関係者に配られたものです。当初は兵役からの除隊や戦地からの凱旋の際に関係者へ記念として配ったもので、日清戦争を契機として誕生しました。

その後は、兵役以外の各種記念や店舗の宣伝など、様々な目的で盃が作成されました。磁器が大半を占めますが、中には漆器で作成されたものも見られます。



元文小判



天保丁銀



一円銀貨 (明治 17 年)



万博記念メダル (昭和 45 年)

銭貨・メダル (相馬一郎コレクション)

相馬 一郎氏 寄贈

相馬一郎氏が収集した銭貨・記念貨幣・メダル等合計 78 セット、171 点のコレクションの一部です。

歴史や社会の変化、人々の生活をうかがうことのできる貴重な資料です。

元文小判や天保丁銀をはじめとした江戸時代の銭貨、明治時代以降の貨幣、歴史的な出来事や各種イベント、諸外国との交流などを記念した貨幣・メダルなどから構成されています。

◆ 栗橋関所と関所番士

栗橋関所は、江戸時代、日光道中（江戸と日光を結ぶ街道）の栗橋宿に設けられた関所です。関所では、旅人と荷物の取調べを行っていました。特に「入鉄砲に出女」といわれる、江戸へ持ち込まれる鉄砲と、江戸から出る女性の通行を厳しく取り締まりました。

栗橋関所は、寛永元年（1624）に設置されたとされています。利根川には「房川渡」と呼ばれる渡船があり、関所は栗橋側の渡船場に設置されていました。幕府では房川渡と対岸の中田宿（現古河市中田）の名をとって「房川渡中田関所」と呼んでいました。

関所には、関所の仕事を行う関所番士が置かれました。当初は富田・新井・佐々木・森の4家でしたが、何度かの交代があり、江戸時代後期には加藤・足立・島田・富田の4家になりました。



やり
槍

足立 正路氏 寄託

江戸時代

栗橋関所番士・足立家に伝わった槍です。当家に残された記録の中に、天保2年（1831）に浅草で槍を入手したことが記されており、この槍が該当すると考えられます。

足立家の先祖は美濃国（現岐阜県）出身で、尾張藩に仕えていました。その後幕臣となり、貞享2年（1685）に金町松戸関所（現東京都葛飾区）の番士となりました。寛政12年（1800）に栗橋関所に番替となり、明治2年の関所廃止まで務めました。



穂 先



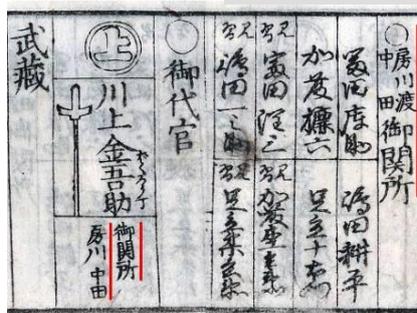
けんれいしゅうらん
県令集覧

島田 昌弘氏 寄贈

万延元年（1860）

江戸幕府の郡代や代官の一覧です。代官は幕府領の行政全般を司る役職で、郡代は代官よりも広域の幕府領を支配していた役職です。

この集覧によると、栗橋関所は馬喰町にいた代官 川上金吾助の管轄下であり、関所番士として富田、嶋田（島田）、加藤、足立の4名、見習として同名字の者が4名いました。



拡 大

◆ 久喜高等女学校

久喜高等女学校（現 埼玉県立久喜高等学校）は、久喜に設置された高等女学校です。高等女学校は、小学校卒業後の女子が5年間通う学校で、現在の中学校と高等学校をあわせたような学校でした。

久喜高等女学校は、明治43年（1910）に久喜町外四か村（久喜町、太田村、鷺宮村、江面村（以上、現 久喜市）、須賀村（現 宮代町））の組合立として設立された「南埼玉郡久喜裁縫女学校」を前身としています。

その後、大正8年（1919）に久喜町外十五か町村の組合立として「久喜実科高等女学校」に生まれ変わりました。現在の久喜高等学校はこの年を開校年としています。大正10年には組合立から県立へと昇格し、県内で4校目の県立高等女学校となりました。

昭和23年（1948）には「埼玉県立久喜女子高等学校」、同24年には「埼玉県立久喜高等学校」と改名し、今日に至っています。

『紫草』第四号

小林 純氏 寄贈

昭和3年（1928）

久喜高等女学校の学友会・同窓会が発行した会誌です。

巻頭の会長による「再び会員諸子に望む」という文章に続いて、生徒の俳句や詩、和歌、自治部や学芸部、運動部、園芸部など各部活動の記録、遠足の紀行文など、様々な活動についての記事があります。



表紙

久喜高等女学校卒業アルバム

高橋 雄介氏 寄贈

昭和10年（1935）

久喜高等女学校の卒業アルバムです。第13回目の卒業記念として、昭和10年（1935）3月に発行されたものです。

教員23人及び卒業生145人全員の顔写真が掲載されているほか、奈良への修学旅行写真、氷川神社（現 さいたま市大宮区）や片倉製糸工場（現 熊谷市）への遠足写真、校内各所での集合写真などが掲載されています。



中扉



校舎全景

◆ 久喜の鉄道と駅

市域の鉄道と駅には、JR宇都宮線（東北本線）に久喜駅・東鷲宮駅・栗橋駅、東武伊勢崎線に久喜駅・鷲宮駅、東武日光線に栗橋駅・南栗橋駅があります。また、東北新幹線と上越新幹線が市内を通過しています。

JR 宇都宮線は、日本鉄道株式会社 第二区線（大宮－白河）の一部として、明治 18 年（1885）に大宮－栗橋が開通したものです。開通と同時に久喜と栗橋に停車場（駅）が設置されました。東鷲宮駅は昭和 57 年（1982）に設置されています。

東武伊勢崎線は、東武鉄道として明治 32 年（1899）に北千住－久喜が開通し、久喜停車場が設置されています。明治 35 年には久喜－加須が開通し、鷲宮停車場が設置されています。昭和 4 年（1929）には杉戸（現 東武動物公園駅）－新鹿沼で東武鉄道日光線が開通し、栗橋駅が設置されました。南栗橋駅は昭和 61 年に設置されています。



くきえきかいぎょう しゅうねん きねんきつぷ
久喜駅開業 100 周年記念切符

個人 寄贈

昭和 60 年（1985）

明治 18 年（1885）に開業した国鉄久喜駅（現 JR久喜駅）の開業 100 周年を記念して発行された切符です。

3 枚一組となっており、表面には、久喜駅や提燈祭り、市役所など市内の風景写真が印刷されています。

裏面には、久喜駅の歴史や明治 19 年（1886）の時刻表などが印刷されています。印刷された時刻表によると、久喜に停車する鉄道は上下線とも一日 3 本ずつでした。

とうぶ みなみくりはしえきかいぎょう きねんきつぷ
東武南栗橋駅開業記念切符

個人 寄贈

昭和 61 年（1986）

東武日光線 南栗橋駅の開業の記念切符です。同日に開業した杉戸高野台駅と一体になっています。

切符はパズル状になっており、折り目に沿って折る方向を変えると、違う面が出てくるようになっています。それぞれの面には、両駅の風景画、時刻表、プロフィールが現れるようになっています。

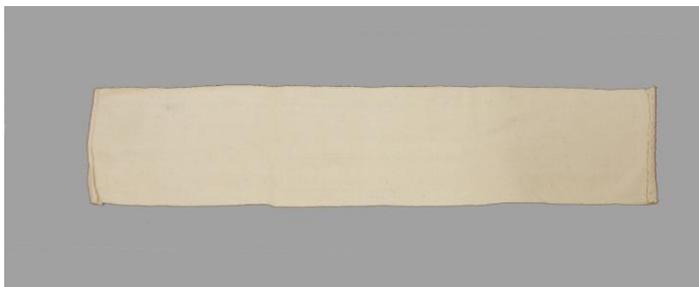




瀬戸樽



徳利



酒袋

醪 (蒸米を発酵させたもの) を酒と酒粕に分離させる際に使う袋です。酒袋の中に醪を入れ、上から圧力を加えることで袋から酒が染みだし、袋内には酒粕が残ります。

ひらさわしゅぞうかんけい しりょう
平澤酒造関係資料

平澤 榮蔵氏 寄贈
 菖蒲町 (現 久喜市菖蒲町菖蒲) で酒造を行っていた平澤酒造に関する資料です。「関取」という銘柄で売り出していたことがわかります。

平澤酒造の創業時期は不明ですが、明治 20 年 (1887~) 代には酒造を行っていたことが史料から確認できます。昭和 18 年 (1943) 頃に廃業したと伝えられています。

かつては市内にも数多くの酒造人がいましたが、現在、市内で酒造を行っているのは 1 軒だけとなっています。



れいぞうこ
冷蔵庫

池田 和子氏 寄贈
 氷で冷やす冷蔵庫です。上部の扉の中に氷を入れることで、全体が冷えるようになっています。

明治時代には既に電気で氷を作る技術が確立していましたが、家庭用冷蔵庫に組み込むほど小型化されていませんでした。そのために氷屋が大規模な製氷機で氷を作り、冷蔵庫用に各家庭へ販売しに回りました。

なお、家庭用電気冷蔵庫の製造開始は昭和初期で、一般に普及するのは昭和 30 年 (1955~) 代以降でした。



埼玉県久喜町 岡安梅太郎製



武州桜田村字西大輪 関根製麵所



武州加須町 木村精米所製



武州大山村字柴山 山崎製麵所

うどんほうそうし
餛包装紙

小林 純氏 寄贈

久喜市域をはじめとした埼玉県東部の製麵所による餛の乾麵の包装紙です。
餛の原料である小麦のほか、富士山や日の出、恵比寿などのおめでたい絵柄が描かれています。

現在、埼玉県東部での麦栽培はあまり多くありませんが、昭和30年代までは盛んに栽培されていました。



製麵機

平井 弥一氏 寄贈

捏ねたうどんやそばをローラーの部分で板状に伸ばし、次に板状になったものを互い違いのローラーの部分で麺にします。

この製麵機を使っていた農家では、セキソンサマ(石尊様: 大山阿夫利神社のお祭り)やハンナサマ(榛名様: 榛名山のお祭り)、ノウアガリ(農上がり: 農作業が一段落した7月中旬頃の休日)などのお祝いの時、そばを食べるために使っていました。昭和26年(1951)頃には既に使われていました。



くりはししよくひん しじょう まえか
栗橋食品市場 前掛け

岡本 美知子氏 寄贈

くりはししよくひん しじょう まえか
栗橋食品市場の前掛けです。栗橋食品市場は、現在の栗橋北2丁目に存在していた民営の青果物卸売り市場です。昭和9年(1934)の開設許可以来、長年地域の流通を支えてきましたが、流通環境の変化などにより平成16年に閉場となりました。

市場では、昭和30年頃まで仮設舞台を設営して芝居が上演されたり、女子プロレスの興行が行われたりもしていました。



食品市場の風景 (昭和11年)



なが もち
長 持

原・下出・河原地区 寄贈

明治4年(1871)

にしおおわ ししまい
西大輪地区で行われている獅子舞の用具を保管していた長持です。長持は衣類などをしゅうのう
収納するための木箱です。

うらがわ
フタの裏側に「明治四辛未年六月」とあり、製作年代が分かります。

西大輪の獅子舞は、300年前から伝わるとされる獅子舞です。7月25日に近い日曜日に、西大輪神社を中心として村回りを行っています。



西大輪の獅子舞



はり 針
はこ 箱

島田 昌弘氏 寄贈

はり いと さいほうどうぐ いっしき
針や糸などの裁縫道具一式を入れておく箱です。

上部の半開きの蓋の部分には、針山を置きました。また、棒を立てて留め具で布を固定し、引っ張りながら縫い合わせることで、弛みがないように縫うことができました。

下部の小さな引出しには、針やハサミ、ヘラ、糸、ボタンなどの小物を入れました。



はこ 箱
まくら 枕

島田 昌弘氏 寄贈

はこまくら ゆかみかた くず ね
箱枕は、結った髪形を崩すことなく寝られるように作られた枕です。

伝統的な日本の髪型は、一度結ったら数日洗わず、そのまま持たせました。そのために使用したのが箱枕です。箱枕では頭ではなく首のあたりを乗せて寝ました。

ていめん たい まる
底面が平らではなく丸みを持っているのは、丸みを持たない平底の形状のものに比べて寝返りをうちやすいからです。



だい 台
はかり 秤

榎本 康二氏 寄贈

はか はかり さら
重さを量る秤です。上の皿に量りたい物を置くことで、中のバネの力で針が動き、該当する重さの目盛りを指します。それまで使われていた竿秤に比べて簡単に重さが量れるようになりました。

目盛りは、外側に伝統的な重さの単位である貫、内側にキログラムが記されています。

1貫=3.75キログラム



か やりぶた
蚊遣豚

高橋 雄介氏 寄贈

か やり かとり せんこう も
蚊遣（蚊取）用の線香などを燃やすための容器です。蚊遣豚は江戸時代後期に登場し、おが屑などの煙で蚊を追い払っていました。明治時代以降は殺虫成分の除虫菊を練り込んだ線香が作られました。

当初は蚊遣の容器として徳利を使っていたところ、徳利の形が豚に似ていたため、専用容器を作る際、豚の形に作られたとの説があります。



ふきさしふいご
吹差鞆

榎本 康二氏 寄贈

鞆は、鍛冶（金属を打ち付けて製品にする）を行う際、炉の温度を高くするために炉の中に空気を送り込む道具です。

吹差鞆は、箱鞆とも呼ばれました。柄を動かすと、側面ら風が出てくる仕組みになっています。押しも引いても風が出てくるようになっていました。

農具が機械化される以前は、鉄製の農具を製作、修理するために鍛冶が各地にいました。



あんどん
行灯

内山 貴光氏 寄贈

行灯は照明の道具です。中に油の入った専用の皿（灯明皿）を置き、その中に糸で作った芯を入れて、火を付けて明かりとします。風が吹いても火が消えないよう、まわりに和紙が貼ってあります。

油は、菜種油など植物の種から採ったものが多く使われました。



ゆのしき
湯熨斗器

高橋 雄介氏 寄贈

布の皺を伸ばす道具です。お湯の温かさで布の皺を伸ばすとともに、底から出るようになってい蒸気によって皺を伸ばします。側面から炭を入れることで温かさを保つことができます。



でんきこて
電気鋺

佐藤 佳乎氏 寄贈

布の皺を伸ばす道具です。電気によって緑色の釜の中が熱くなることで、鋺が温かくなります。

アイロンの普及により鋺は徐々に姿を消していきましたが、和服の仕立てでは鋺が使いやすいこともあり、使われ続けています。

- 久喜市史編さん室 1992『久喜市史 通史編 下巻』埼玉県久喜市
- 渡邊良夫編 1997『埼玉ふるさと散歩〈久喜市〉』さきたま出版会
- 日本民具学会 1997『日本民具辞典』ぎょうせい
- 埼玉県教育委員会 1998『埼玉人物事典』埼玉県
- 本多静六博士顕彰事業実行委員会 2002『日本林学界の巨星 本多静六の軌跡』
- 加藤光男 2003「栗橋（房川渡中田）関所番 足立家文書」『諸家文書目録VI』埼玉県立文書館
- 埼玉葛地区文化財担当者会 2005『埼玉葛の酒文化』
- 北口由望 2007「日清戦争期における凱旋記念盃の社会展開」『専修史学』第 42 号
- 栗橋町教育委員会 2008『栗橋町史 民俗Ⅰ 身のまわりの生活史と人の一生』
- 栗橋町教育委員会 2010『栗橋町史 民俗Ⅱ 水と暮らし、年中行事』
- 埼玉県立歴史と民俗の博物館 2011『特別展図録 円空 ころを刻む-埼玉の諸像を中心に-』
- 久喜市教育委員会 2011『久喜市栗橋町史 民俗Ⅲ 町場と農村の暮らしと信仰』
- 久喜市立郷土資料館 2011『第 1 回特別展 久喜市の名宝』
- 久喜市立郷土資料館 2011『第 2 回特別展 中島撫山没後 100 年展』
- 久喜市教育委員会 2012『久喜市栗橋町史 第五巻 資料編三 近現代』
- 芳賀明子 2013「明治期風景銅版画をめぐって」『文書館紀要』第 26 号 埼玉県立文書館
- 久喜市教育委員会 2013『久喜市栗橋町史資料 2 栗橋町郷土誌・静村郷土誌』
- 久喜市教育委員会 2013『久喜市栗橋町史 第四巻 資料編二 近世』

資料名	寄贈者(寄託者)	資料名	寄贈者(寄託者)
木造不動明王坐像(円空作)	幸福寺【寄託資料】	久喜駅開業100周年記念切符	個人
旧医王院薬師堂棟札	不動寺【寄託資料】	東鷲宮駅開業記念切符	小林 純
本多静六 著書	小林 純	東武南栗橋駅開業記念切符	個人
演孔堂詩文	内田 貞一	冷蔵庫	池田 和子
中島撫山筆「山中問答」	折原 一	長 持	原・河原・下出地区
栗橋学校初級卒業証書	島田 昌弘	銭貨・メダル	相馬 一郎
栗橋河岸 吉岡倉庫 預り証	吉岡 良昭	栗橋食品市場 前掛け	岡本美知子
高橋荘之丞 屋敷図	高橋 雄介	鍔	岡本美知子
国勢調査 調査票	平井 弥一	炭火アイロン	榎本 康二
槍	足立 正路【寄託資料】	湯熨斗器	高橋 雄介
県令集覽	島田 昌弘	電気鍔	佐藤 佳乎
『紫 草』第四号	小林 純	蚊遣豚	高橋 雄介
久喜高等女学校卒業アルバム	高橋 雄介	針 箱	島田 昌弘
瀬戸樽【平澤酒造関係資料】	平澤 榮蔵	箱 枕	島田 昌弘
徳利【平澤酒造関係資料】	平澤 榮蔵	柄 鑑	島田 昌弘
酒袋【平澤酒造関係資料】	平澤 榮蔵	台秤	榎本 康二
風呂敷【平澤酒造関係資料】	平澤 榮蔵	製麵機	平井 弥一
市役所開庁記念額	久喜市役所	鞆	榎本 康二
記念盃	高橋 雄介	行 灯	内山 貴光
饅頭包装紙	小林 純		

【敬称略】

久喜市立郷土資料館 第3回企画展 展示図録
新しい久喜のたからもの
 —新収蔵資料展—

平成 25 年 7 月 20 日印刷・発行



発行 久喜市立郷土資料館

〒340-0217 埼玉県久喜市鷲宮 5-33-1

TEL 0480-57-1200